

ほのぼのと亡びしやうに生くるもの大東京の朝の葦むら

老いゆかむくろきシエパードうつせみの大なることをひそかにいとふ

ひげをとこ衣洗ひし不忍の公衆便所いまもおそろし

ゆふつ野にかりがねは春のはばたきすああいくつある心のつばさ

春の寺ものおもふこと飛ぶごとくわが打つ鐘はなりわたりゆく

銀閣寺庭掃くをとこひたすらに砂あやつるは迷ふごとしも

魔の住むはきよきこころとおもふときからんと鳴りぬお寺の井戸は

ふるびたる朝の井戸より汲むことばゆらゆらと立つ去りがたきかな

研究に殺されてよしとまだ思ふわれは不惑の小児なるらむ

え言はねど出直して来いといふことは喉にうづまき咳ばらひしぬ

人参のつぼみのなかのしろき花ほのぼのと子は黙しつづけぬ

鳴きのぼるひばりの空よわれも見む「情ふかき工学」とふ神のまぼろし

さびしさはわがふたつの手 螢絵の団扇を妻に金魚絵を子に

鬼やんま鬼のまなこはまだ若くしづやかに冷ゆそのうすみどり

紅ふかく近代は終はることなきをしづかにうたへ今様「富国」

うなばらに帆柱いくつやすみをり皇帝ネ口の平和のごとく

本の埃しんしんと飛ぶこの部屋よわが眠るとき墓穴めくや

科学技術蔑しいぢめる流行あり よろこびて技術むさぼるものらに

昼休みわづかに心すくはれつ 富者も貧者も 死 はなぎたふす

どすどすと来て殺すものふえゆけばこのキャンパスも夕焼けが怖し

白ふぶき走りやまずも子はいづこ妻いづこわれはうつむき滑る

かりがねは宇宙の大悲知るべしとホームレスいへりあらくさの中

杭のあたまかんと打つをとこあり空に落ちゆくをとこのあたま

夢の中も教師となりて問うてば学生らみな出刃もてわらふ

動物園その奥ふかく鏡あり「最悪の獣」ほほゑみてゐつ

二十世紀きはまりし日かパチンコ屋も右翼も「同期の桜」鳴らせり

阿寒湖よ釣り竿ふたつ子とふたり波寄せくればピアにただよふ

さびしさは誰が夢ぬちの神の死か阿寒はくらき雲ながしをり

一竿ををさめむ湖よほのぼのとおもき雲映ゆ水のしづけさ

見るほどに素水すすしく走りをり子はわかさぎをうつくしみ食はず

人類の加速度を空は背はずさらさらと蜻蛉浮かべて暮れぬ

オゾンホール杞憂のごとくはるかなりゆふぐれに会ふ吾子ときつねと

カムイよりカムイへわたす紺の星夜果つるまでたかくまたたく

さくらますその遊びなきうつしよを湿原の花とよべば明けゆく

ぼつつんと頭ひかりて去りゆけり丹頂に子ひとりわれに子ひとり

キラコタンふんはりひくきこの岬丹頂は三羽翔ちて戻らず

飛ぶカムイ地を這ふカムイともどもに嵐のごとき眉間もちたり

古潭より川はつづけりアイヌよく漕ぐこと子らに教へたりけむ

生も死もきらめくわざとしてありき捨て舟はただ揺れてゐたりき

世界あかく明けゆくときぞ忘れけむすべからく子は飛ぶといふこと

われを見る樹下の牡鹿よ ひとはいつ滅ぶかきみもわかつてゐるか

鹿を追ふをのこらの夢とほけれど明日なきごとくわれは楽しむ

カムイひとり熊となりては身をささぐざいんぢいんと蝉ふるあした

熊として水ゆくものよ本当はたはれをのわれせまき道ゆく

インターネット世界めぐらすそが何ぞ熊 大将水のみやめず

熊の道に熊笹伏すとうつくしき青のカムイをわが乱しゆく

ひたすらに泥炭となる草生ありこころ貴なる泥といふべし

コンピュータ作すこと丹頂あゆむことおもへば同じ 長靴に泥

父超えむしづかにふかく秘むる子よ天涯の日は黄に疲れたり

ここにゐる螢は平家のみといふあしたひかれりうつし世の平家

湿原の大円盤のしたたりにやはらかき茶をひとはたてたり
青とんぼかすみとなりて遠く散るこなたの妻子しろき筒なす
妻よ子よわれらは蝦夷の蝉となりここに暮らさむ白ふかき陽よ
陰秘めてやさしき草よ コンピュータやめよとはつひに言はずそよげり
死はいつかこの湿原へかへることまたあふぎ見ぬキラコタン岬
夏の果て文字盤は水のひかり満つ神話なくひくくわが身は老いよ
ホームレス大学のなかにひとりきて焚き火してをりしづかなりけり
歌やめて日本すくへと声はいふ銀の壁まで朱に照らされて
時のごと積もる本あり小半時その間隙をわが住みかとす
ふふと笑ふ日本がなんぼのものぢやいな翡翠かがやく掌のさびしさに
日本の余命六年といふ吊り広告たのしむごとし終電にひとは
こころなく進めとは誰もいはざれど松の枝擦りて車輻はつづく
ひたぶるに日本捨てたき夜もありきいまひくく響る闇夜の雨は
どんたくよ机の上に柿ふたつさんさんと冬の日がここに落つ
ふかきより声湧くことのうつくしさひとはさびしき名もてうしなふ
木洩れ日に照らされて髪はかがやけりいかなる冠ももつなかれ子よ
明けちかき江戸川の瀬の音すなりひくく舵取れ霧の船頭
弁天堂のむかうほかりと見えてくるだぶだぶコートの鳥おばあさん
よろめけるおほきなおほきな餌袋ひらくすなはち鳩はつどひ来
鳩ダルマくくくと鳴くはひとか鳩かわからねばみな遠巻きに見る
ああここへも来たのだ彼女 ニューヨーク中央公園の鳥おばあさん
風のなか鳥おばあさんはばたけり悲しくてなぜかうれしくなりぬ
門前にホームレスおらぶ「おまへたち、日本をこんなにしたおまへたち」
去りゆけどベッドのうへに人型の空気あるらむわが臨終も
夕光かがやかざれど激情はほろびしにあらずさうだな鳶よ

維新の日直ぐなる声のたちしとふ直ぐなる声をすこしうたがふ

太平洋うなそこに燃ゆる花ありと戦争の世も教へられしや

夜桜をかへりみるときわがおもふプラトンの国家マキャベリの国家

われはいま眠りの裡かファックスを白鳥黒鳥わきいでて舞ふ

列島は下半身から花咲きて丹田あたりむづがゆき朝

フォッサマグナ腰帯としてゆらゆらと母なる国は踊りやまずも

葦笛の音かるきこと悲しみぬ日は熟れて老いし牧神の顔

ことのはの葉裏にそつと棲みふるとひとりひとり十五年経ぬ

をとめとは音もなく吾をつらぬきしさびしさなりき群青の鳩

忘れしにひとは忘れずふれあひしむかしの夜の桃も椿も

ラーメン屋「天下無敵」の丸椅子に着くとどつぷり夜が来てをり

青春と晩年をつなぐわが命あしたふくらみゆふべほころぶ

カレー屋の硝子戸あけてわれの身を入れむとするに咳ひとつ出づ

心すくみわれはときどき息つくもカレー屋主人はずつと見開けり

シユメールの昔より王は火をあたへ水をうばひき砂漠の民の

芝草を焼くほのほみゆ 姦淫はなさざれど知りしイエス・キリスト

あまかける正義の兵も土となり壺となり花街の酒をたたへむ